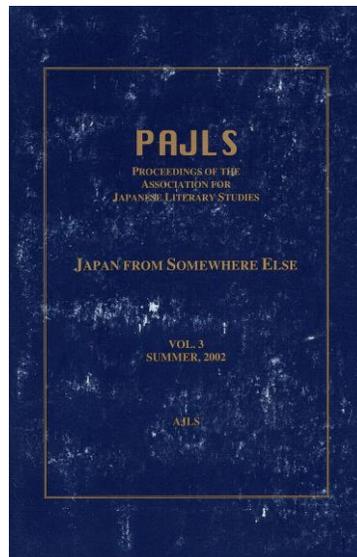


「ふたごたちの旅」

多和田葉子 Tawada Yōko 

*Proceedings of the Association for Japanese
Literary Studies* 3 (2002): 143–144.



PAJLS 3:
Japan From Somewhere Else.
Eiji Sekine, Editor; Joyce L. Detzner, Production Editor.

ふたごたちの旅

多和田葉子 (Tawada Yōko)

ボストンは不思議な町だった。町を歩いている人たちの中にはわたしがよく知っている人たちと全く同じ顔をしている人がたくさんいるが、実はみんな別人なのである。小学校二年生の時にいつもいっしょに遊んでいた友達そっくりの顔の人とすれ違って思わず、「なっちゃん、」と声をかけそうになった。でも、なっちゃんであるはずがない。顔が同じなだけで、全然違う人だということは、頭の中では分かっている。それでも心は動いてしまう。道路の向こう側に立っているあの人は、中学の時、隣の家に住んでいたのヤマダ君と同じ顔をしている。思わず挨拶しそうになるけれども、もちろん全くの他人である。オートバイにまたがって赤信号を待っているあの男はコウジロウと同じ顔。あいつには言いたい文句がたくさんあるけれど、あの男はコウジロウではないのだから、文句を言っても仕方がない。

彼らは顔が同じなだけで、全然違う人たちなのである。生まれたのもアメリカだし、しゃべっている言葉は英語で、多分、日本語など全く話さないのだ。1960年、大阪で生まれた一卵性双生児の片割れはみんなすぐにボストンに養子に出されることに決った。一卵性双生児は別々に育てると天才になる可能性が大きいという理由で、ふたごの片割れがすべてボストンに送られてきて、もう一方の片割れは大阪に残されることになったのだ。しかし、わたしは、この理由はごまかしではないかと思っている。本当は、遺伝子の研究のために、同じ遺伝子を持つ人間を違う言語で育成してみようと考えどこかの大学の研究所が、大阪府に賄賂を払って、そういう決まりを作ってしまったのではないか。

二つの町は、大陸と海で隔てられている。東周りで考えれば、大西洋とユーラシア大陸とに隔てられている。西回りで考えればアメリカ大陸と大平洋とに隔てられている。ふたごたちは、お互いの町を訪問することは普通禁じられている。ふたごというのは、一度顔を合わせると近くで暮らしたくなるものなのだそう。特に、年を取れば取るほど、そうなるらしい。だから、片割れを訪問することは禁じられている。

実はわたしもふたごの片割れである。片割れであった。片割れの姉が三年前に自動車事故で死んだので、二つの町の間を行き来する権利を得た。自動車事故というのは偶然性があまりにも強いので、いくら一卵性双生児でも、同時に交通事故で死ぬことはめったにない。病気ならば、似た病気に近い時期にかかることが多いのだが。それで、わたしは単一人間になってしまった。

きのう、マスオさんそっくりの人が、喫茶店に入ろうとしたわたしを見て、驚いて目を丸く見開いて立ち止まった。それから、息を吞んで、つらそうに目をそらして、何も言わないで去っていった。わたしは姉ではないが、わたしとこの人が今から知り合って、恋人同士になってもいいわけだ。

二人の気持ちがぴったり合うことは初めから分かっている。でも、そうすると、大阪でわたしを待っているマスオさんが余ってしまう。

わたしは、姉が死んでから毎年ここへ来るようになった。この町では、馴染みの深いたくさんの顔に囲まれながら、とても孤独である。それでも、何かはわたしを惹き付けてやめない。外国と言うよりは、子供の頃住んでいたのに、ある時亡命してずっと離れていて、大人になって又帰って来た町にいるような気分である。だから、子供の頃のことはみんな忘れてしまったけれども、これからこの町の家、通り、池、港などを一つ一つ新しく網膜に焼きつけていけば、いつかは、すべてを思い出した場合と全く同じ結果になるのではないかと思うのである。